
Shall we back?

shinshu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S h a l l w e b a c k ?

【Nコード】

N 9 7 3 6 Q

【作者名】

s h i n s h u

【あらすじ】

いつものようにおしゃべりした後、5時間とたたないうちに、高校時代からの親友「オサム」が、自殺した。

動機もなし、直接の原因は自殺に達しない状況下で、俺こと「タカシ」は何があつたのか究明しようと活動を始める。

「オサム」のパートナー「ノリコ」の持っていた図面と、彼のプログラムから察するに、彼はタイムマシンを開発していたらしい。

何者かによって妨害が入る中、「タカシ」と「ノリコ」のペアはタイムマシンを完成させ、彼を救い出せるのか。

犯人はいつたい誰なのか。

「なるべく科学的に」を追求したミステリー風のタイムトラベル小説。

01 ニプロローグ（前書き）

小説などの執筆は初めてですので、読みづらいところなどあるかもしれません。

ハードSFを目指していますので、くどかったり、説明がちになっ
ているかもしれません。

01 - プロローグ

相変わらずの光景が目飛び込んでくる。

ディスプレイラックが6基、中央の4基には27inchのディスプレイが、少し小ぶりのディスプレイが左右に1基ずつ。5基のタワーマシンがそれぞれのラックの下に陣取っていてその一つは2基のディスプレイに接続されている、らしい。

ここは俺の旧友、オサムの部屋。これほどの設備を高校生のころから所有して、アップグレードしつつ使っていたとは、新ためて感嘆の念を抱かざるをえない。惜しい人を亡くしたものだ。

”あいつ”の凶報を聞いたのはちょうど1週間前のことだ、遺言も何もなしに、突然、大学の屋上から身を投げてしまったとのことだった。

その後、式は身内だけで済ませられ、その後、”あいつ”のご両親から、部屋を整理したいんだけど、と言って声をかけられたのだった。

”あいつ”は念願をかなえ、K大の物理学部に進学し、素粒子物理を専攻していた。

既存の概念にとらわれず、コンピュータを使いこなす”あいつ”は、大学の中でも、優秀な生徒の一人で、その道では注目されていた人の一人だったし、その日、彼のラボに遊びに行ったときは、満ち足りた様子だったのに。

そんな”あいつ”が、なぜ自殺したのかはいもく検討もつかない状況からして、警察は自殺と判断したし、大学の監視カメラには一人で校舎の縁に立ち、迷うように一瞬ためらったあと、身を投げる”あいつ”の姿が映っていたからそうなのだろう。

しかし、”あいつ”に何ら自殺する原因があったわけではなく、”あいつ”のご両親からも、何な心当たりがないとの答えがかえっ

てきただけだった。

俺は、おそらく、”あいつ”と一番長く付き合っていたのだろうが、そもそもあいつは自殺などするタマではなかった。

そう、”あいつ”はきつと俺の親友と呼ぶべきひとだったんだろう。

高校の頃から「知り合い」とか「友達」とかより親しい関係にあったのだろうし、第一、今俺がこの大学にいるのだって”あいつ”と一緒にがんばったおかげなのだろうから。

だとしたら、俺はその真相を、警察が「何かあったんでしょ」と言っただけで済ませたその「何か」を説明する義務があるだろう。

俺はそう心に決めたのだった。

俺と”あいつ”が知り合ったのは7年前、たまたま同じ高校に入学し、たまたま同じクラスになったからで、まさに偶然の出会いという奴だった。俺の名前「キハラ タカシ」と”あいつ”の名前「キハシ オサム」は50音順でいくとそのクラスでは隣同士で、”あいつ”は出席番号で一つ前。つまり、記念すべき高校生活一年目、一学期間俺の前の席に居座り続けたわけだ。

はじめは超然として馴染みづらかったオサムだが、なぜか、少しずつではあるが俺は打ち解けることができた。

オサムは明治創業の大手企業の重役の家系の、いわゆる「坊ちゃん」ってやつで、家柄もよく、俺とはまるで正反対のような人だ。

だが、オサムは見下すところもなく、俺とまるで兄弟のように接してくれた。

俺は、PCを操り、あらゆるものをコンピュータにシミュレーションさせる彼は、魔法使いのように見えたり、

逆に彼は外で馬鹿みたいに走り回るおれが「まぶしくて、うらやましく、まるで兄貴のよう」に見えたそう。

性格も家柄も全く正反対の俺らだがなぜか馬が合い、卒業後はそろってK大学に進学した。

大学に入っても、俺らの友情は変わらず、たまにお互いの研究室をちよくちよくのぞきあっていたのだった。

「その日」は俺がオサムの研究室に行き、しばらく談笑した後、俺は帰宅したのだった。

オサムはパートナーのノリコと「ベータトロン」という加速器をいじっていた。

オサムの研究は実験を元に研究を進める予定らしく、ミニチュアを作って大学側から予算を引っ張ってこようとしているとのことだった。

そこで、同じK大の工学部に声をかけたところ、中村典子という機械制御工学専攻の俺らと同じ年の子が名乗りを上げ、それ以来二人でペアを組んで研究を進めているらしい。

端からみればお似合いのカップルなのだが、二人ともいわゆる「理系の人」だからなのだろうか、いっこうにつきあう気配すら見えなかった。

そこにはわずから時間後に悲劇が起こるとは考えられないような、幸せな時間が流れていたのだった。

02 パスワード

オサム部屋は、懐かしい空気が依然として漂っている。

整理すると言っても、どうしたらいいのだろうかと思われてしまっている。

おばさんは「タカシ君が使えるものがあれば、オサムの遺品を持って行ってほしいの。あたしたちには使い方はわからないし、あつても悲しみを誘うだけでしょうから。」と言っていたが、

俺はここから何も動かしたくない、この空気を壊したくないというのが本心だった。

大学に入り、それぞれ研究室に入ってから、そっちがお互いの居場所になってしまつて、生活の中心がそっちに移つてしまつて、家を訪問しあふことは急激にその頻度を減らしていた。

だからこの部屋に入るのは半年ぶりだ。

懐かしい記憶のまま、コンピュータの電源を入れる。

例えばオサムはコンピューター、パソコンを一から教えてくれた恩師でもあるのだ。タカシが経済学部に入ったのは統計処理、数値処理のおもしろさ、ツールとしての強力さをオサムが教えてくれたからだつたのかもしれない。

ふと自慢げなオサムの姿がフラッシュバックする。

「うちのPC群は、このコマンド用ノートパソコンに全部接続されているんだ。というのも、それぞれのPCがばらばら動くよりも協力して仕事した方が早いだろ。でもそのためには司令塔が必要だ。」

「それがこのノートパソコンって訳だ。」納得した様子のタカシ。

オサムがすかさず突っ込む

「ぶつぶり、残念でした。実はこのノートPCじゃスペックが足りないんだ。だから処理の司令塔はこつちのPC。ノートパソコンは

僕と司令塔役のPCとの通信役さ。」と言いながらほかより少し大
きめの、でも少し古そうなPCを指さす。

「おい、これ古そうだぞ」突っ込むタカシ。

「と思うだろ。でもこいつ外見は歴戦の強者で、中身は最新のハー
ドに積み替えられてんだぜ。」さも得意げなオサム。

「おい、じゃあ、まさかこのPCって、」

「うん、全部自作したやつさ」

「すげーな、やっぱすげーよおまえ」

「ちなみにこのPCだけは学校とかでも使うWindowsが入っ
てんだ」

「えっ？どういうこと？」

「うーん、つまり、簡単に言つとおまえでも使えるようなPCとい
うことだ。」

「あ、そうですか、どうせ俺は機械音痴の運動バカですよ。」

「なに、おれは運動音痴の Geek かってか」

「ハハハハハ」

部屋にあふれる二人の笑い声。幸せな時間の思い出だ。

例のノートパソコンの前にいすを持ってきて、画面を開く。

電源ボタンを押す。

メーカーのロゴが表示され、

Loading Operating System . . .

見慣れた表示。

が、しかし

Could not load .

Please try again .

Press any key to reboot .

＊＊

「あれ？」

リブートさせてみる。

＊＊

Could not load.

Please try again.

Press any key to reboot.

＊＊

「おかしいな」

今度は、司令塔といわれていたPCの電源を入れてみる。

＊＊

Welcome to TBC Command Console

PASS:|

＊＊

パスワードを入力するタカシ

＊＊

You are Not Welcome

What your name:|

＊＊

一瞬どきつとさせる”You Are Not Welcome: あなたはアクセスできません”の文字。

「相変わらず冗談がきついな」

そう思いながらもnameを打ち込む

＊＊

You Are Not Welcome

What your name:takashi|

＊＊

普通ならこれで”Welcome to OSAMU WORLD

”というメッセージが現れるはずだった。

が、出てきたのは、

**

I have a message for you.
Please type your keyword: |

**

「えっ？」

予想外の反応。

何かがおかしい、そして、あいつの死も。きっとこれはあいつの遺書なのではないか。

そんなことを思いつつ、Keywordに思いつくものもなく、しばらく悩む。

「まさかな」そう思いつつも

そのままエンターキーを押す。

**

Password is Incorrect.

If you want to boot "Windows",

Press "0" key.

you want to boot "Linux",

Press "1" key.

you want to return TBC cons

ole, Press "Backspace" key.

:

**

「だめか。でもこうなると、これも危ないな」

"2"をタイプする。

すると

**

System is loading Files...

Loading File System Controller.

..

complete.

User ID: |

**

ユーザー名とパスワードを入力すると、息を吹き返すように、全部のパソコンが起動する。

**

System Checking.....

Complete.

System all Green.

Connecting All PC.....

Complete.

Welcome to TBCFSC!

**

すぐに全部のディスプレイにシステムの構成図が映し出される。

「全部コピーして...」

もし、オサムが事件に巻き込まれたのならば、これも狙われるかもしれない。

ならばこれを全部コピーして復元できるようにしなければ。そう思う思考だった。

**

\$Backup.c

Welcome to TBCFSC Backup Program.

Please type Backup storage:

**

手持ちのメディアでは足りそうもないので、容易にインターネットから隔離できる外付けハードディスクを指定する

**

Please type Backup storage: /dev/sda1/backup|takashi.bkp

Now Working.....

Time Remain: 5h
Resource: Before: 5% used
After: 92% used
Please wait some more...

「こりや今日はいったん退散だな」

タカシは事件性について、オサムの両親に報告しようかどうかでしばらく迷いはしたが、

オサムがもし何かの事件に巻き込まれているとして、それには両親を巻きみたくないとオサムは思うだろうし、第一タカシもそう思う。それに、まさかとは思うが、こっちの動きが漏れるとタカシ本人まで狙われかねない。

そういう思考の結果、黙っておくことに決め、オサムの両親に「オサムのデータが破損しないようにバックアップをとっている」とだけ事情を説明し、つけっぱなしにさせてもらい帰宅した。

03・打ち合わせ（前書き）

投稿期間が空いてしまいましたが、投稿再開です。

今後、春休み中はまめに、その後も一週間に一度ほど更新していきますので、よろしく願います。

03 - 打ち合わせ

ノリコは「あの日」、オサムとしばらく打ち合わせした後、帰路に就いた。

家に帰り、夕食をとって入浴し、もうじき寝ようかと言うときにはなつて、いきなり凶報が届いたのであった。

その後すぐに着替えて、大学にとって返したが、就いたときには黒山の人だかりができていて、よく様子は見えなかった。

一晩明けて、次の日彼女は警察から呼ばれ、いくつか尋ねられたが、そんなことよりも早く大学に戻り、彼が死ぬ直前までいたというその場所を確認したかった。

「どう考えても彼と最後にあつたのは私だ。ならば、何か変化が起きたならば、私しかわからないこともあるかもしれない。」

そういう思いが終始頭の中に浮かぶと同時に「どう考えても彼が自殺する動機が見つからない。」という疑問、また、はぐらかされて終わってしまったオサムの実験の目的・・・謎がありすぎる。

その事件には絶対に裏があると彼女の第6感は語っているのだ。

結局、彼女がオサムの実験室に行き着いたのはその日の夜遅く。だが、すでに警察が捜査した後で、マーカーやらステッカーやらがちこちの貼り付けられていた。

+++

ノリコが実験の補佐に志願したのは、純粋な好奇心からだった。

「ベータトロンを作ってくれ、重力の実験をするんだ」そういう話が物理科から持ち込まれたとき、工学科の者は何ら興味を示さなかったが、ノリコは違った。

「ベータトロンって、粒子加速装置でしょ、何でそれで重力の研究になるのかしら。高エネルギーを扱う機械で、保存量である重力を扱うなんて変な人」

それがまずオサムという人間への興味に繋がった。

オサムと初めてあったときの印象は、「まさに理系の人」という程度だったが、話をするうちに、「実は私も理系の人だ」と言うことに気がつき、彼の理論と、その研究に興味がわいてきた。

オサムは「まずは基礎理論を確定して俺の理論形態が正しいかを確認かめ、その後でアインシュタインに挑戦するんだ！」と意気込んでいたので、世紀の大実験でもやるのかと、自分の力量に不安を感じたものだが、彼から渡されたのはなんてこと無いただの実験室用ベータトロンの要求スペック一覧だった。

オサムとノリコはキヤドを使って簡単な設計図をくみ上げ、その後、試行錯誤を重ねて少しゆがんだ形のベータトロンを完成させた。

次にノリコが声をかけられたのは粒子の回転方向と速度を自由に变え、かつその軌跡の軌道がある程度調整できるようにする改造を施す時だった。

彼らはまた二人で試行錯誤を重ね、彼の言う許容値ぎりぎりのものが完成した。

彼は実験をするといい、ノリコはみたいと望んだが、「内緒、全部完成したら教えてあげるよ」と言って結局は何をやっているのかは見せてもらえなかった。

しばらくして、ノリコまた呼ばれ、今度は同じものをあと1つと左右対称なものを2つほしいと言われた。

いい加減嫌気がさしたノリコはある条件を出すことにした。

「ねえ、もし図面を書いてほしかったら、何をやりたいのかぐらいは教えてよ」

オサムは答える

「じゃあ、いい物を見せてあげよう」

そういつて、PCのマウスを動かし、スクリーンセイバーを解除する現れたのはパスワード画面。

しかし彼は、キーボードを打つ代わりに、机の中からフロッピーディスクを取り出した。

「いまだきフロッピーとは珍しいわね」

「まあ、こういうご時勢だからな、これなら簡単に複製されないだろ、曰く『古参のローテク、ハイテクに勝る』とね」

そういう受け答えがあり、

PCの画面に現れたのは、CADで描かれた何かの機械の設計図例のゆがんだベータatronが4基、互いに帯磁可能な位置に並んでいて、その中心には椅子が据え付けてある。

「いったい何者なの？」

たずねるノリコにオサムは

「知リたかつたら、ベータatronよろしく」と軽くあしらう。

その笑顔に、いたずらっ子のような幼さ、意地悪なようでさわやかな感じがあり、たじろいでしまうが、気を取り直し、ノリコは発注書をその日のうちに書き上げた。

ベータatronが届いたという知らせを受けて、オサムの研究室を訪れたのが「あの日」だった。

ノリコが訪ねたときオサムはいつも通り、PCに向かっていた。

ノリコはこっそり近づき、オサムの真後ろで突然「わー！」と叫んだ。

「あゝー！、つとでもいうと思ったのかい？」

叫んだ後、けらけらと笑っているオサム

「え？」

「ほら、そこ」

指差す先には、といつても、研究室中画面がおいてあるが、画面があり、なんと“LIVE TV-CAM:03”と書かれたウィンドウに監視カメラの映像が映し出されていた。

「何だ、きづいてないふりしてたの？」

「当然、君の行動は廊下から追尾してたよ」

「まあ、一人前のストーカーね」

「そうでもないさ」

造作ないやり取りと笑顔がかわされる。

「この部屋のPCはいつたい何台あるの、前から気になってたけど、この部屋そこらじゅうにPCがあるわよね」

「だろ、自慢の一室さ、この部屋には合計52台のPCがあるんだが、操作できるPCはここに並んでる5台だけさ。」

というのも、ほかの47台はクラスターといって、分散処理系に組み込まれてんだよ。

この分散処理系はSATA接続で相互通信できるようつながっていて、3Gbpsの相互高速通信が可能になってるんだ。

5台のPCはギガビットランで、制御用の一台のPCに接続され、そいつで処理データの分散作業を行い、さらに4台のPCにつながって・・・と以下トップダウン式に処理がつながっているんだ

だが、ここがミソで、このシステムがほかと違うことは、トップダウンした後、別系統で処理結果を操作したPCにアップロードするギミックにある。

これは僕が学生時代に考え付いたことなんだが、この方式を使うことで、47台のクラスターで、数学科がくもの巣にしているスパコン2台分の計算能力を持つという、そういうわけなんだよ

えつと、わかってもらえたっかな？」

「いえ、さっぱり、でも聞いたかったのは、最後のスパコン2台分のスパコンだということなの？」

「ああつと、まあ、それでいいや。」

「で、結局、こいつでどうやって何をする気なのよ、これを並べると何が起こるのかしら？」

「じゃあ、わかりやすくまとめてあげよう！ 君のために資料を作ってきたんだよ。といった信じる？」

「もちろん、信じないわ」

「あ、そう、実は学会用の資料なんだが、まあ、一般向けのものだから、わかりやすいとは思うよ」

「ええ、わかったわ、見せて」

PCのディスプレイにプレゼンテーションソフトが起動し、スライドショーが始まる

表題は「重力の変動による時空間の変動および位相の変化」

オサムが解説する

「相対性理論は知ってる？」

「いいえ。名前は聞いたことはあるけど、どんなものなのかは知らないわ」

「じゃあ、そこから解説していこう」

03・打ち合わせ（後書き）

次回の投稿でも、マシンの理論だけは紹介します。
どう作るかは楽しみ。ということ。

04・プレゼン

スライドをページ進めてオサムは解説を続ける。

「アインシュタインが言うには、時間と、空間と、重力には非常に綿密な関係があるんだ。

たとえば、そうだね、

みんなは空間が存在すれば、時間が存在するし、空間の中に重力がある、そう思っているだろ、違うかい？」

「ええ、当然よね」

「ところがどっこい、時間は重力でなんともなるし、もつと言うと、空間は重力を作ることだってできる。今の物理学では理解できないけど、時間は空間を形成できるかもしれないし、重力から空間を作り出せるかもしれない、ということになる。」

「どういうこと？」

「こういうこと」

画面がかわり、球形のものが中央にあり、グリッドが、球の下に表示されている。

Enterを押すとグリッドがゆがみ始め、穴があき、そこに別の色でグリッドが補完された。

「こうやって、重力で空間をゆがめ、さらには重力自身でもって空間を補うこともできるってこと。」

オサムはさらに続ける

「じゃあ、それを時間でやったらどうなるか」

Enterをもう一度押し説明を続ける

「こうやって、時空平面を一度重力でたたき切り、その後重力で空間を補うことだってできるだろ」

「まあ、あくまでも理論的な話でというのだったら、出来なくもない話よね。」

「じゃあ、そこから導き出せる答えが何か分かるかな？」

「さあ？」

「じゃあ、教えてあげよう。」

オサムは数ページにわたり数式やCGの並んだスライドをふっ飛ばした後最後から2番目のページを表示させる。

「こういうこと。」

そのページには、ただ一行”重力で時間を制御できる可能性”とだけ記されてある。

「これはつまり、時間旅行ができるっていうことなの？」

「そうだよ」けろつとして答えるオサム。

ノリコはただ呆然とすることしかできなかった。

「きみと一緒に作ってたのは、その実験装置の一部なんだ。もつとも、あくまでも実験という段階だったけど。でも意外とこれでも行けることが分かってね」

「えっ、ということは、その．．．私たちは、タイムマシンを作っていたの？」

「ありていに言うとな、ほんとそういうはずじゃなかったんだけど、あるギミックを思いついてね。」

まだよくは動かないかもしれないけど、限定的だけど、いけるといふことがわかったんだよ。

そう、うまくいけば、一定の広さの空間を位相変換で別の時空に送りだせるということがわかったんだよ」

「えっ、すごいじゃない、それって、なんていうか、最高よ！早速行きましょ、どこの時代がいいかしら．．．そうね．．．」

「待て、待て、待て、ちょっと待って！！」

「何よ、じらさないでもいいじゃない」

「いや、まだ完成してないんだ。」

「え？」

「誰も完成してるとも、動くとも言っていないだろ」

「えゝ！？」

「いや、そうだろ。」

「なんだ期待しちゃったじゃない」

「いや、まあ、出来ることはできるから期待しすぎではないけどね」
「で、どうすればいいのかしら」

「まあ、落ち着いて、完成したら教えてあげるよ。」

そこまで来てチャイムが鳴った。

「あれ、誰だろ」

オサムはPCに向き直りカメラを操作して連絡通路の入口に向ける
そこにはタカシが手を振っていた。

「どうぞ」

インターホンにオサムが答え、しばらくしてドアが開いてタカシが入ってくる

「じゃあ、二人にいいものを見せてあげよう」

オサムはそう宣言して、ノートPCを手にベータトロンへ向かい、
主電源を入れる。

「さあ、ご注目、ここに置いてあるのは、GPSレシーバだ。もち
ろん種も仕掛けもないよ」

「それは怪しいものだ、そういうのに限って、なにか仕掛けがある
んだろ」

タカシがチャチャを入れるとオサムは「まあ、そう言わずに」とた
しなめ、

「動いてないのを君らの目で見とくんだよ」

そう言つてPCのボタンを押した。

数秒して「どう？動いてないだろ」というオサム

二人はうなずく。

「ところが、こうなってるのさ」

そついつて、PCの画面を見せるオサム

そこには”移動量” 2 m 2 6 c m 5 . 3 m m 経過時間” 5 . 2 秒

理論値との誤差” 2 . 4 m m 誤差補正後の値との誤差” 0 . 0

m m ”

との表示がある。

「え、ウソだろ。」驚愕した様子のタカシに「じゃあ動かしてみな」といつて、GPSレシーバを渡す。

「ああ、確かにあつてるなこれ」といつて納得するタカシ。

そんななか、「いけない、うちの学部棟もう閉まっちゃうわ。じゃあ、私はこれで」と、

いまだ熱気のためきらないノリコは”種明かし”を見ずに行かなくてはいけない、後ろ髪をひかれる思いはあつたものの、また今度、見せてもらえばいいという考えが勝り、研究室から去って行ったのだった。

それが最後になるとは、おもってもみなかつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9736q/>

Shall we back?

2011年6月9日13時30分発行